



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

(酪農経営支援要員確保実証事業)

酪農は貴方を待っている

酪農新規就農・定着事例報告

(酪農生産基盤安定化促進事業)



社団法人 酪農ヘルパー全国協会

目 次

1	国の近代化方針等施策との関連.....	1
2	酪農ヘルパーからの新規就農.....	2
3	新規就農・定着事例	
	Ⅰ 中標津町 阿知波 秀晃氏.....	3
	Ⅱ 常呂郡置戸町 竹内 進氏.....	5

1 国の近代化方針等施策との関連

新たな「食料・農業・農村基本計画」（22年3月30日閣議決定）において、「農作業の外部化により、高齢化や担い手不足が進行している生産現場の労働負担の軽減を図るとともに、規模拡大や主要部門への経営資源集中等を通じた経営発展を促進する観点から、地域の実情を踏まえつつ、生産受託組織や酪農等のヘルパー組織の育成確保を推進する。」とされており、また、酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針（22年7月22日公表）において、酪農等経営におけるコスト低減・省力化のため、ヘルパー等支援組織の充実・強化を推進することとされている。

国は「食料・農業・農村基本調査会」の答申を受け、乳製品と加工原料乳に市場実勢を反映した価格形成への移行等を内容とする「農政改革大綱」と今後5年間を視野に入れた「農政改革プログラム」を10年12月に公表。

また、11年3月には「新たな酪農・乳業対策大綱」を策定し、総合的に施策を推進。

国は「食料・農業・農村基本法」（11年7月公布）に基づき「食料・農業・農村基本計画」を策定。同計画は5年ごとに見直されることになっており、現在の基本計画は22年3月に策定。

これと併せ、32年度を目標年とする新たな「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」等を22年7月に公表

基本方針のポイントとしては次のとおり

- ・所得補償制度の導入
- ・持続可能な酪農及び肉用牛生産への転換
- ・家畜衛生対策の充実・強化
- ・自給飼料基盤に立脚した酪農及び肉用牛生産への転換
- ・消費者ニーズに応えた畜産物の生産・加工・流通と自給飼料基盤に立脚した国民の理解の促進

2 32年度を目標年とする新たな「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」等を22年7月に公表の抜粋

第1の3の（3）酪農及び肉用牛生産における多様な経営の育成確保

②酪農及び肉用牛生産への新規就農者の育成・確保

酪農及び肉用牛生産を営む者が減少傾向で推移する中、経営者の高齢化が進み近い将来には高齢の経営者の大量リタイアが見込まれている。一方で将来を担うべき経営者の育成は遅れていることから、生産基盤を維持するため、新規参入者や後継者といった新規就農者の確保のための取組を推進する必要がある、特に、酪農ヘルパーについては、新規就農者の技術習得の場として活用されることが期待される。

（4）の② ヘルパー等支援組織の育成

酪農及び肉用牛経営におけるヘルパー等の支援組織は、畜産農家の労働負担の軽減や就業者の傷病時における経営継続の面で大きな役割を果たしており、新規就農者の育成・確保や生産基盤の維持・強化にも資するものであることから、こうした支援組織の充実・強化を推進する。

第3 近代的な酪農経営及び肉用牛経営の基本指針の基本的な考え方

抜粋：ヘルパー、コントラクター、TMR センター等の支援組織の活用等の取組を織り込んで設定する。

このように、酪農ヘルパーからの新規就農への期待は大きいものがある。

次に酪農への新規参入について、社団法人酪農ヘルパー全国協会調べ、北海道農業開発公社調べ、（現在は公益財団法人北海道農業公社）、北海道庁調べの具体的な調査についての表を参照してください。

2 酪農ヘルパーからの新規就農

(1) 社団法人酪農ヘルパー全国協会調べ

酪農ヘルパーからの新規就農

(毎年実施している酪農ヘルパー実態調査に基づき各都道府県団体からの報告を基に作成)

平成	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
全国	5	4	4	6	5	4	3	8	7	6	10	7	4	8	6	6	9	8	110
北海道	5	4	4	5	3	4	3	6	4	4	8	6	4	7	4	5	7	6	89
都府県				1	2			2	3	2	2	1		1	2	1	2	2	21

(2) 酪農への新規就農 (北海道農業開発公社調べ、現在は公益財団法人北海道農業公社)

前の職業は問わない

	S57	S58	S59	S60	S61	S62	S63	元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	計
計	5	5	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	9	8	12	12	151
新規	4	5	8	7	10	9	10	9	10	8	4	8	6	7	11	10	126
移転	1		2	3		1		1		2	6	2	3	1	1	2	25
在地											4	5	2	1		1	13

(3) 酪農における新規就農者の推移 (北海道庁調べ)

酪農における新規就農者の推移 (北海道庁調べ)

平成(年)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	計
新規就農計	143	172	170	195	199	206	194	182	192	169	159	174	190	168	2513
新規学卒	95	106	108	110	110	111	119	107	98	91	93	95	91	93	1427
Uターン	28	42	41	63	68	69	56	61	63	57	49	63	80	54	794
新規参入	20	24	21	22	21	26	19	14	31	21	17	16	19	21	292
新規参入うち リース事業	9	12	14	12	13	13	11	11	12	12	10	9	7	11	156

3 新規就農・定着事例 I

「酪農ヘルパーから新規就農を実現」

中標津町 阿知波 秀晃氏（32）愛知県知多市出身

妻の阿知波 昌代さん（34）千葉県鎌ヶ谷市出身

家族は長女楓さん2歳と次女あかりさん1歳の4人家族

阿知波 秀晃さんが北海道に来た理由は「子供の頃から、生き物を飼う事が好きだった事」そして「北海道の大自然で暮らしてみたい事」その事から北海道で酪農がやりたいとの漫然とした夢がありました。



阿知波 秀晃さん 牧場前で



牛舎内で

さて、北海道に来た目的は地元の高校を卒業後、南九州大学園芸学部農業経済学科へ進学し農業経済を学んだ、夢の実現にむけて北海道の十勝管内上士幌町にある猪狩牧場で実習を開始、平成14年4月から15年3月までの1年間酪農の基礎を学びました。酪農家と1年間生活を共にし、1年の酪農経営の流れを体験できた。

漫然とした夢から酪農をするなら北海道で自分の牧場を持ちたい。いろいろなタイプの牧場の作業をしながら酪農の実際を見ることが出来る「酪農ヘルパー」という仕事を知った。牧場を持つなら、酪農専業地帯の北海道中標津町を知る。中標津町の酪農ヘルパー組織の（有）ファム・エイに入社した。

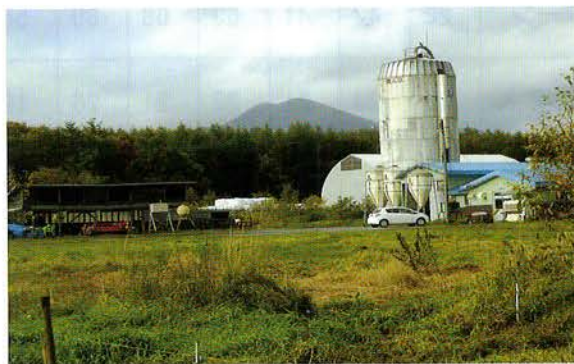
（有）ファム・エイに入社してから、多種多様な経営に対応する為の技術習得で必死、搾乳機器の取扱い、トラクターの操縦、疾病の対応等々、仕事・地域になれた頃に同じ職場で働く「昌代さん」と出会った。牧場を持ちたいとの夢は昌代さんも共通の夢、新規就農は夫婦でないと出来ないと思っていたので実際に新規就農を決意したのは昌代さんと知合ってから、お互いに新規就農の夢があったからこそ頑張ろうと思った。

就農の条件は酪農の経験があること、配偶者がいること、手持ち資金があることこの条件をクリアして就農の時期を考えていた。

中標津町農協より現牧場を紹介された。中標津町で酪農ヘルパーとして活動していたことから、話は進み、平成19年11月に入植となった。実際には公益財団法人北海道農業公社からのリース事業（5年間）で平成24年3月に買い取る。



搾乳室前でファム・エイ渡部社長と全国協会沼崎部長



牧場風景



酪農ヘルパー時代の事務所



現役のヘルパーの仲間



酪農ヘルパー時代のファム・エイ渡部社長と
今でも時々訪れては励まされている



搾乳機器等

行政、農協からの支援については、北海道からは就農支援資金150万円、中標津町新規就農者対策事業から300万円、JA 中標津から公社営牧場リース料25%補助(3年間)の手厚い助成が得られた。

経営概況は施設として、牛舎413,1平方メートル、育成舎213,84平方メートル、その他農機具庫、堆肥舎、住宅。草地面積は44ヘクタール、採草地30ヘクタール、放牧地14ヘクタール。

搾乳機器はパイプラインユニット4台、バルククーラー3, 200リットル

主な作業機はトラクター2台、モアコン・テッド・レーキ・ロールベラー・ラップマシン・ブロードキャスター・ロールカッター

現在、乳牛頭数は45頭、育成牛等25頭、年間生産量330トン(平成22年度)、平均個体乳量7,500kg、



牛舎

経営目標

放牧を主体とした経営(放牧が可能な5月~11月)、牛を長持ちさせる経営、長命連産を図るため、牛に無理をさせない。



放牧場

新規就農・定着事例 II

「夢を追い続けて、牧場を経営」 常呂郡置戸町

竹内 進氏（46歳）神奈川県相模原市出身

妻 三子さん 岡山県出身

家族は長女7歳と長男3歳

竹内牧場



竹内進氏 後方はアブレスト方式6頭立て



新規就農までの経過を笑顔で話してくれました
中央は近所の田中真牧場主

竹内氏は相模原市の県立高校を卒業後、スーパーマーケットに就職し、ここでは4年間勤務した。その後、ワーキングホリディを利用しニュージーランドに1年留学し帰国し、英語も少し上達したこともあり、キャンプ座間の米軍基地内のスーパーマーケット等で働いていたが、英語力を身につけたいと再びニュージーランドの土を踏んだ。ここでは日本語の教師として半年、オーストラリアで半年を過ごした。

再びニュージーランドの首都クライストチャーチの英語学校に1年研修中に羊牧場にファームステイし牧場に興味が出てきた。ニュージーランドでの2回目の牧場実習での生活スタイルが牧場に本格的に興味を持ったことが酪農に興味をしめしたことに繋がった。

帰国後、日本での農村生活への憧れが、子供の頃からの動物好きと相俟っていよいよ本格的に動き出した。

意を決して、社団法人酪農ヘルパー全国協会の門をたたき、新規就農の第一歩として酪農ヘルパーとして働くことからスタートした。酪農の技術を身につけるために酪農実習目的で北海道常呂郡置戸町の谷水牧場で実習後、当時のJA置戸の井上課長の紹介で2年間の酪農ヘルパーを経験した。この頃、目の病気を患い、やむなく酪農ヘルパー利用組合を退職し目の手術を受けた。

十勝の観光牧場に1年勤務後、酪農を目指す夢をかなえるために、そして生活の安定を目指すために帯広の大樹町にあるサンエイ牧場に従業員として勤務、ここでは700頭前後のメガファームで、上司に恵まれ酪農技術等の指導を受けることが出来た。

この時期に、同じ牧場で働いていた三子さんと結婚し、長女はこの頃誕生した。三子さんは岡山県出身で農業、酪農は未経験であったが酪農に興味があつて、ここで働いていた。

40歳になって「いよいよ新規就農地探し」を本格的に始動した。

最初は十勝で候補地を捜していたが、牧場等あきが捜せなかった。新規就農をあきらめきれず次に足寄町で、町役場等にも足を運び候補地を捜したがやはり見つからなかった。

その後、過去お世話になった谷村牧場に相談、アドバイスを受けJAきたみらい（旧JAおけと）を訪ねた。この地は気心も知れて知合いも多く、ここで本格的に新規就農地を捜すこととなった。

牧場経営者の田中 真氏やJAの星賀畜産課長等に指導を受け、JAで離農跡地を2～3軒候補地として紹介してくれた。全てを選定候補地として、協力者と相談し現在地の牧場にたどりついた。

現在地に家族と移住して、ここで長男が生まれ家族4人そして犬1匹、猫2匹の新規就農生活が本格

的に始動した。



生乳処理室



バルククーラー

現在、搾乳牛50頭、育成牛40頭で乳量が搾乳牛1頭当り29kg、1頭当りの年間乳量8,700kg 放牧主体が夢なのであまり乳量は追っていないとのこと。

牛舎はフリーストール牛舎150平方メートル、その他アプレスト方式6頭立て搾乳室、育成舎等、草地は約40ヘクタールでの経営スタイル。

入植にあたり北海道農業公社のリース事業5年を利用し現在3年目。

入植後の5年後には買い戻し借入の償還はL資金利用で最長20年予定。



フリーストール牛舎



とそれに続く放牧場

新規就農者、竹内進氏の新規就農までの経過

平成20年

- ・ 平成8年に酪農実習でお世話になった置戸町酪農家谷水氏に新規就農を相談。
- ・ JAきたみらいに新規就農の志を文書にて相談、JAの担当者と相談がスタート。
- ・ 7月には就農地視察で家族と置戸町を訪問。
- ・ 竹内氏は就農予定地を希望し、予定地の家主に譲渡の意向確認。

平成21年

- ・ 1月には置戸町、JAきたみらいの合同会議で竹内氏の希望を対応協議し、3月に本人と最終的な意向を確認した上で決定することを置戸町、町農業委員会、JAきたみらいが合意。
- ・ この間に北海道農業公社事業参加の意向確認
- ・ 本人とも数回に亘り置戸町、町農業委員会、JAきたみらい等集団構成員と面接、意思確認。
- ・ 3月に「置戸町新規就農者支援育成協議会」を発足。それぞれの支援の役割確認、基本的なスケジュール決定、保証人の決定。
- ・ 4月に家族と置戸町に転居し、同じ集団の大平牧場に実習生として従事。
- ・ 町内酪農家との交流も兼ね、「酪農ヘルパー」にも臨時で従事。

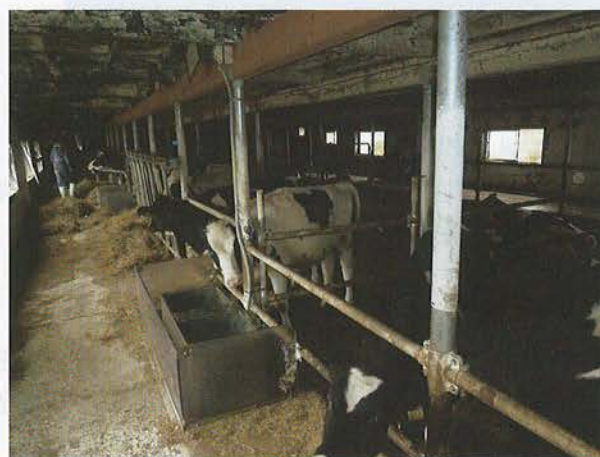
- ・ 牛の飼養管理技術、草地の管理、収穫等の実践的な営農技術を学ぶ。
- ・ この間、来年に向け事業計画を樹立。

平成22年

- ・ 「平成22年度強い農業づくり」予算内報、事業実施計画承認。
- ・ 就農後を考え、借受予定地にて牧草の収穫をする。
- ・ 既存牛舎等の改修工事開始。
- ・ 10月には長期実習を終え、新規就農を開始する（乳牛13頭を導入）。
- ・ 既存牛舎の改修工事完了、乳牛35頭の導入。



新規就農前から相談に乗ってアドバイスを
している近所の田中真牧場オーナー（右）



育成舎



牧草のバンカーサイロ



堆肥舎



竹内牧場の牛舎、現在は育成舎として利用



現在のフリーストール牛舎、後方に放牧場

社団法人 酪農ヘルパー全国協会

〒101-0047

東京都千代田区内神田2丁目5番3号

児谷ビル2階

TEL 03-5577-5135

FAX 03-5577-5136

メールアドレス：info@d-helper.lin.gr.jp

ホームページ：<http://d-helper.lin.gr.jp>